

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

小・中学生にみられる「いじめ」の早期発見・予防
策の検討：
児童・生徒の友人関係の問題に対する保健室対応の
実態調査より

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2016-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時枝, 夏子, 高橋, 清美, 黒川, 雅幸, 大坪, 靖直, 大重, 育美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000501

著作権は本学に帰属する。

資料

小・中学生にみられる「いじめ」の早期発見・予防策の検討

—児童・生徒の友人関係の問題に対する保健室対応の実態調査より—

時枝 夏子¹⁾ 高橋 清美¹⁾ 黒川 雅幸²⁾ 大坪 靖直³⁾ 大重 育美¹⁾

本研究の目的は、小学生・中学生の友人関係の問題に対する養護教諭の認識と、保健室での対応の実態を明らかにすることである。A県の養護教諭部会に登録している養護教諭を対象に自記式質問紙調査を実施した。質問紙は計381部郵送し、140部回収した(回収率は36.7%、有効回答率は100%)。データの分析には統計ソフトSPSS version22を使用した。その結果、児童生徒の友人関係の問題に対する認識については、67%の養護教諭が保健室に来る児童生徒の友人関係を大抵把握しており、84%が友人関係の問題のきっかけを相談者から聞いていた。保健室での対応については、95%の養護教諭が受容的な態度に関わり、28%が不定愁訴でも児童生徒の気が済むまで保健室に滞在することを許し、89%が児童・生徒が教室に戻ることを目標として対応していた。また養護教諭の経験年数による比較では、経験年数が高い養護教諭に児童・生徒からいじめについて打ち明けられやすい傾向がみられた。以上より、養護教諭は児童・生徒から友人関係の問題について詳細な内容の相談がなされており、相談者を教室に戻すという教育的視点をもちながら受容的な態度で対応していることが明らかとなった。今後は、友人関係から発展するいじめ問題への具体策を講じる上で、質的研究方法を用いて養護教諭の具体的な対応方法を明らかにすることが課題である。

キーワード：養護教諭、小学校、中学校、友人関係、いじめ

I はじめに

子どもは成長発達の過程にあり、人との関係性の築き方が未熟で、友人間においても様々な問題を抱えている。昨今の「いじめ」の背後にも、子ども同士の間関係の不具合があるとされるが、自傷行為につながる点で、心身の健康上から放置できない深刻な問題である。平成23年度の小学生・中学生の自殺者数は43人で、そのうち4人(全て中学生)は「いじめ」の問題を抱えていたと報告されている¹⁾。「いじめ」は一種病的な様相を呈し、共通性が見られる発現過程があることを森田らは指摘している。その上で、発達段階途上にある子どもたちの問題解決には、仲間関係の調整など「大人」の具体的な支援が必要であり、適切な介入により自傷行為などの事件に発展させない早期発見・予防の視点が重要であると強調している²⁾。

このような子どもたちが一日のほとんどを過ごすのが学校であり、身体的・精神的な問題が生じた場合に専門的に介入するのが保健室に勤務する養護教諭である。保健室の設置は、学校保健安全法により

「健康診断、健康相談、保健指導、救急処置その他の保健に関する措置を行うため」とされているが、実際にはこれ以外の目的で入室する児童・生徒の増加が指摘されている³⁾。日本学校保健会が平成23年10月に行った保健室利用状況に関する調査では、養護教諭が記録を残しておく必要があると判断した小・中学生の保健室利用の背景要因で最も多かったのは、「友達との人間関係の問題」であったと報告している⁴⁾。

現代の保健室利用の状況を背景に、1997年の保健体育審議会答申により、養護教諭に「健康相談活動」という新たな役割が明文化された。これは養護教諭が学校の中で唯一、医学・看護学的素養を有する教育職員としての専門的立場のもと、身体症状の背景に心の問題を有することに着目して「心と体の両面から相談・支援を行う」というものである⁵⁾。そして言及されている心の問題には、既存の調査結果からも人間関係、またそこから発展するいじめなどの問題が大きく影響していることが示唆されている。

そこで本研究では、学校の中で子どもたちの心と体の健康に携わる養護教諭に焦点をあて、養護教諭からみた子どもたちの問題と、それに対する養護教諭の対応を明らかにすることとした。

1) 日本赤十字九州国際看護大学

2) 愛知教育大学

3) 福岡教育大学

II 研究方法

1. 研究デザイン

無記名自記式質問紙法を用いた横断的量的記述研究で行った。

2. 研究の対象

1) 研究対象者

A 県における公立小中学校教育研究会の養護教諭部会に登録している養護教諭を対象とした。養護教諭の経験年数や学校の規模等の条件は設定せず、対象地域にある学校の養護教諭全員を対象とした。

2) 研究実施地域

国公立の小学校、中学校が合わせて 500 校規模の地域で、研究協力が得られた A 県。

3. データ収集期間

平成 26 年 2 月～3 月

4. データ収集内容

質問紙は、「養護教諭」、「健康相談活動」、「友人関係の問題」、「見立て」、「連携」、「困難感」のキーワードを基に、医学中央雑誌で文献検討を行い、作成した。作成した質問紙についてはプレテストを実施し、内容の妥当性を検証した。質問紙は A4 サイズ計 3 枚で構成した。

対象者とその所属校の特性については 15 問で構成した。回答は、選択式で一部記述式の問いを設定した。

対象者の勤務校における児童・生徒の友人関係の実態と相談行動、養護教諭の認識と対応、対応時の連携、養護教諭がいづく困難感に関する内容については 30 問で構成した。

回答は 5 件法で、「とてもそう思う／とてもあてはまる」、「ややそう思う／ややあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない／あまりあてはまらない」、「全くそう思わない／全くあてはまらない」を 1 点～5 点で得点化した。なお Q25 と Q27～30 は逆転項目である。

5. 調査方法

研究対象地域の養護教諭部会に本研究の内容と目的、個人情報保護に関する事、収集データの使用方法について説明し、アンケート調査の実施許可を得た。研究者は質問紙を対象者に郵送で配布し、同封した返信用封筒に厳封して返送するように依頼

した。

6. 分析方法

属性および各変数の記述統計量を算出した。養護教諭の経験年数を、10 年未満、10 年以上 20 年未満、20 年以上 30 年未満、30 年以上の 4 群に分類した。これは、文部科学省が実施する研修が教員のキャリア発達の観点から、5 年、10 年、20 年に区分されていることに基づく⁶⁾。本区分における養護教諭の内訳は表 1 に示す。

4 群間で各質問項目の比較を一元配置分散分析で行い、その後多重比較として Tukey 法を行った。解析に際しては、IBM SPSS for Windows ver. 22 を用いた。なお有意水準は、5%未満とした。

表 1 対象者の属性 (N = 140)

養護教諭経験年数	n	%
10 年未満 (～9 年)	34	24
10 年以上 20 年未満 (10 年～19 年)	18	13
20 年以上 30 年未満 (20 年～29 年)	27	19
30 年以上 (30 年～)	61	44

7. 倫理的配慮

研究のすべての過程は倫理原則の遵守のもとに行った。依頼文書には研究の趣旨、研究への協力は任意であること、得られたデータは統計処理後に研究目的にのみ使用し、一定期間の保存後は裁断、破棄すること、匿名性が保持されること、今後学会や専門誌に投稿予定であることを明記し、質問紙の回収をもって同意が得られたものとした。また、本研究は平成 25 年度日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した (承認番号 : 13-05)。

III 結果

アンケート配布は、国公立の小学校、中学校が合わせて約 500 校規模の地域である A 県で行った。質問紙は計 381 部郵送し、140 部回収 (回収率 36.7%)、有効回答は 140 部 (100%) であった。

1. 対象者 (養護教諭) の特性と対象者の所属校の状況

1) 対象者の特性

対象者の所属校の内訳は、小学校が 64%、中学校が 33%、小・中一貫校が 3% であった。対象者の養

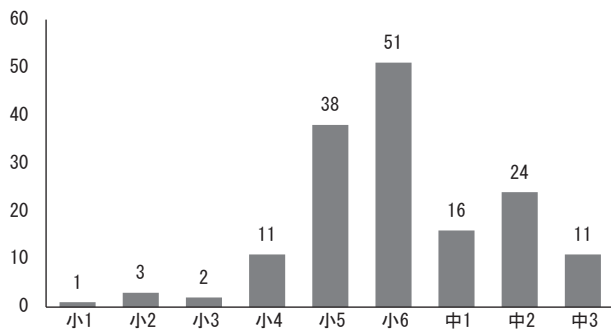


図1 友人関係に関する相談の年齢別相談件数

護教諭歴は平均22.4年で、アンケート回答時の所属校での勤続年数は平均2.7年であった。対象校の児童・生徒数は平均281.8人であった。

2) 対象者の所属校の状況

スクールカウンセラーの関わりとしては、77%が「月0回」で、「月2回」または「月1回」が23%であった。保健室登校を認めている学校は全体の78%であった。また学校としていじめの撲滅とその目標を宣言しているのは全体の75%であった。アンケート回答時に「不登校児童・生徒」がいたのは46%で、そのうちの1校あたりの平均人数は3.51人であった。友人関係で気になる児童・生徒がいる対象者は71%、養護教諭1名当たりの「気になる児童・生徒数」は平均4.9名であった。友人関係の問題を相談に来る生徒の割合は女子が93%を占めていた。友人関係の問題に関する月別の相談件数は5月が最も多く、次いで8月が多かった。相談件数は、小学校4年生から増加傾向になり5年生、6年生でピークとなり、中学校では2年生が最も多かった(図1)。また保健室に来室する児童・生徒のうち、約2割に友人関係の問題がありそうだと認識する対象者が全体の68%いた。友人関係の問題を背景にもつ児童・生徒の来室時の症状で最も多い訴えが「頭痛」で、次いで「腹痛」、「だるい」・「疲れやすい」の順が多かった。

2. 保健室に集まる児童・生徒の友人関係の問題に関する情報

保健室は児童・生徒の友人関係に関する情報が集まる場所であることを関連する設問項目で検討した。

1) 保健室に来室する児童・生徒の友人関係の問題が発生する「場」に関する養護教諭の認識について

養護教諭の児童・生徒間の友人関係のトラブルが起きている場についての認識に関して検討した。質問に対する5件法での回答のうち「とてもそう思う」と「ややそう思う」を、「場を認識している」とした。各々の設問に対する回答の内訳は、84%の養護教諭がクラスの中でトラブルが起きている(Q1)と認識し、65%がクラブ活動・部活動(Q2)、51%がインターネット上の書き込みの中(Q3)、62%が携帯電話のメールのやり取りの中(Q4)で起きていることを認識していた(表2)。

このように、半数以上の養護教諭は勤務校の実態としてクラスの中にとどまらない友人関係の問題の発生場について認識していた。

2) 保健室に来室する児童・生徒の友人関係に関する問題の詳細に関する養護教諭の認識について

養護教諭の児童・生徒の友人関係に関する問題の詳細についての認識に関して検討した。質問に対する5件法での回答のうち「とてもそう思う」と「ややそう思う」を「詳細を認識している」とした。各々の設問に対する回答者の内訳は67%の養護教諭が児童・生徒の友人関係は大抵把握しており(Q7)、84%は友人関係の問題が起きたきっかけを相談者から聞くことがあり(Q8)、58%は相談に来た場合は友人関係の話を含み隠さず話してくれ(Q9)、57%はいじめについて打ち明けられることもある(Q11)、65%は直接被害を受けていない児童・生徒から他の児童・生徒の友人関係の話を知ることがある(Q12)と答えていた(表2)。

表2 児童・生徒の友人関係の問題に関する養護教諭の認識

友人関係の問題が発生する「場」に関する養護教諭の認識		場を認識している
Q1. 児童・生徒間の友人関係のトラブルはクラスの中で発生していると思う		84%
Q2. 児童・生徒間の友人関係のトラブルはクラブ活動・部活動の中で発生していると思う		65%
Q3. 友人関係のトラブルはインターネット上の書き込みの中で起きていると思う		51%
Q4. 携帯電話のメールのやり取りの中で友人関係のトラブルは起きていると思う		62%
友人関係の問題の詳細に関する養護教諭の認識		詳細を認識している
Q7. 保健室に来室する児童・生徒の友人関係は大抵把握している		67%
Q8. 友人関係の問題が起きたきっかけを児童・生徒(相談者)から聞くことがある		84%
Q9. 児童・生徒はクラスの友人関係の話を含み隠さず話してくれる		58%
Q11. クラス内のいじめについて打ち明けられることがある		57%
Q12. 直接被害を受けていない児童・生徒から他の児童生徒の友人関係の問題を打ち明けられることがある		65%

このように、養護教諭は児童・生徒の相談行動から友人関係の問題に関する詳細な内容について認識していた。

3. 養護教諭の児童・生徒の友人関係の問題への対応の仕方

養護教諭の児童・生徒の友人関係に関する問題への対応の仕方について各々の設問に対する回答者の割合を算出した。5件法の「とてもそう思う」「ややそう思う」を「実践している」とした。89%の養護教諭が児童・生徒からの相談にゆっくり時間をかけて傾聴し(Q13)、95%が受容的な態度で関わり(Q14)、69%が時にはユーモアをまじえて対応し(Q15)、89%が相談者が教室に戻ることを目標として対応していた(Q16)。また実践状況としては積極的でなかったのが、28%の養護教諭が不定愁訴と思われる相談でも児童・生徒の気が済むまで保健室に滞在していることを許し(Q19)、20%が友人関係の問題は当事者同士で解決するように促し(Q20)、18%が児童・生徒の友人関係に関する相談に対して相談者の問題点を指摘するようにしている(Q21)という結果になった(表3)。

このように、養護教諭は相談者が教室に戻ることを目標にして児童・生徒に受容的な態度で対応して

いた。

4. 児童・生徒の友人関係の問題への対応における連携と養護教諭がいただく困難感

児童・生徒の友人関係の問題への対応における連携と養護教諭がいただく困難感について、関連する設問項目で検討した。

1) 児童・生徒の友人関係の問題への対応における連携(表4)

他職種や家族との連携について問う設問はQ22～24であり、Q23「児童・生徒からの相談内容によってはスクールカウンセラーと連携して対応している」については、調査地域ではスクールカウンセラーの来学が少数校にしかみられなかったため検討からは除外した。5件法の「とてもそう思う」「ややそう思う」を「積極的に連携している」とした。99%の養護教諭が児童・生徒からの相談に対して担任教師と連携して対応(Q22)しており、65%が保護者に情報を伝達していた(Q24)。

2) 児童・生徒の友人関係の問題への対応に養護教諭がいただく困難感

養護教諭がいただく困難感については、Q25、Q27～30で検討した。「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を「困難感をいただいている」とした。51%の養

表3 養護教諭の児童・生徒の友人関係の問題への対応

友人関係の相談に対する養護教諭の対応	実践している
Q13. 児童・生徒からの相談への対応にはゆっくりと時間をかけて傾聴している	89%
Q14. 児童・生徒からの相談への対応には受容的な態度で関わっている	95%
Q15. 児童・生徒からの相談には時にはユーモアをまじえて対応している	69%
Q16. 児童・生徒の友人関係に関する相談では児童・生徒が教室に戻ることを目標として対応している	89%
Q19. 不定愁訴と思われる相談でも児童・生徒が気の済むまで保健室に滞在することを許している	28%
Q20. 友人関係の問題は当事者同士で解決するように促している	20%
Q21. 児童・生徒の友人関係に関する相談に対して相談者の問題を指摘するようにしている	18%

表4 児童・生徒の友人関係の問題への対応における連携と養護教諭がいただく困難感

友人関係の問題への対応における連携	積極的に連携している
Q22. 児童・生徒からの相談内容によっては担任教師と連携して対応している	99%
Q23. 児童・生徒からの相談内容によってはスクールカウンセラーと連携して対応している	34%
Q24. 児童・生徒からの相談内容によっては保護者に情報を伝達している	65%
友人関係の問題への対応に養護教諭がいただく困難感	困難感をいただいている
Q25. 児童・生徒の友人関係に関する相談への対応において職員間の連携や情報の伝達は容易ではない	22%
Q27. 来室した児童・生徒から友人関係の問題に関する相談をされても対応に困る	2%
Q28. 来室した児童・生徒の友人関係に関する相談内容を担任教師に伝達して良いか悩む	22%
Q29. 児童・生徒からの友人関係に関する相談への対応に十分な時間を確保するのは難しい	51%
Q30. 児童・生徒からの友人関係に関する相談への対応において加害生徒に働きかけるのは難しい	46%

養護教諭が児童・生徒からの友人関係に関する相談に十分な時間をかけて対応することが難しい(Q29)と感じ、46%の養護教諭が加害生徒に働きかけるのは難しい(Q30)と答えていた。その他の設問項目は困難感をいっている割合は低値であった(表4)。

このように、担任教師と保護者との連携は積極的になされており、連携上の困難感は低いが、児への直接的な対応の部分で困難感が高かった。

5. 養護教諭の経験年数による比較

養護教諭の経験年数別に、回答それぞれの平均値を算出して比較した(表5)。有意差は、Q3、Q5、Q11、Q23にみられた(有意水準5%以下)。

Q3「友人関係のトラブルはインターネット上の書き込みの中で起こっていると思う」は10年未満の方が20年以上30年未満に比べて、有意に認識が低かった($p<0.05$)。Q5「頻繁に保健室に来る児童・生徒は友人関係に問題を抱えていると思う」は10年以上19年未満の方が30年以上に比べて、有意に認識が低かった($p<0.05$)。Q11「クラス内のいじめについて打ち明けられることがある」は10年以上19年未満の方が30年以上に比べて、有意に平均値が高かった($p<0.01$)。Q23「児童・生徒からの相談内容によってはスクールカウンセラーと連携して対応している」については有意差はみられるが、スクールカウンセラーの来学が少数校にしかみられなかったため結果からは除外した。

以上の結果より、養護教諭経験年数が長い方が、児童・生徒からいじめについて打ち明けられやすい傾向があった。

IV 考察

1. 発達課題からみる仲間集団形成

本研究では、小学校高学年から中学生に友人関係の相談件数が多い結果が得られた。そこで、養護教諭の認識と対応について考察する上で、まずこの年齢層の仲間関係の特徴について概要を述べる。

児童後期から中学校前半までの、いわゆるギャングエイジが形成する仲間集団を「前青年期ギャング集団(グループ)」という。ギャンググループは同性の同年齢児から構成され、排他性・閉鎖性が強く、合い言葉や掟のような固有の価値・文化体系をもつ。このようなギャング活動を通して、成人後の社会生活に必要なさまざまな社会的スキルや社会的知識が

習得される⁷⁾とされている。

通常ギャンググループでは短期間に順番に仲間からはずされていく「仲間はずし」を経験する⁸⁾。子どもは、「仲間はずし」とはどういうものか、どんな気持ちになるかを体験的に学ぶことで精神的な成長を遂げていく。中学生の友達との付き合いでは、「自己防衛的なつきあい方」と「みんなと同じようにしようとするつきあい方」が顕著にあらわれる⁹⁾。仲間はずし体験はこの時期の子どもにとって大変にストレスのかかる出来事であることが予想される。しかし、仲間はずしを体験して、他者の気持ちを知ることが出来れば、そのストレスは病的なものではなく、発達課題を達成する上で必要な学習の機会ととらえることができると考える。このように友人関係の問題に対応する養護教諭にとって、仲間集団の特徴に応じて、子どもたち自身で課題を乗り越えることが出来るような対応が求められる。

下山⁸⁾は、現代はこのギャンググループが消失し、グループ内での仲間関係における体験(グループ活動)が失われたことで、スケープゴートになった子どもを仲間同士でいじめる行為によって、お互いの共通点を見出し、仲間集団を成立させている場合があることも指摘している。

2. 友人関係の問題に対する養護教諭の認識と対応について

松原らは¹⁰⁾、友人関係の問題で相談に来た中学生16事例について、友人関係を問題とした子どもに対応する養護教諭の反応を分析している。16例中5例が「仲間はずし」に関する内容であった。養護教諭は相談にきた生徒に対して、問題把握・焦点化の段階から、沈んだ気持ちをリラックスさせ、生徒の感情をはき出させる言葉かけをし、生徒の感情のはき出し方向を修正したり、時には相談者と第三者の仲介をしたりして、生徒が自分自身で問題解決できるように助言を行うという対応を組み合わせながら、介入していた。このような介入を行うことで、16事例中15事例は、相談後教室に戻ることができたと、効果を認めている。

また、児童・生徒が養護教諭に求める対応について、上原ら¹¹⁾は中学生20名(男子10名、女子10名)にインタビュー調査を行った。保健室来室生徒が望む養護教諭の対応として【受容】【適切な判断】【指導】【相互関係】【空間】のカテゴリを抽出している。

表 5 養護教諭の経験年数別の平均値の比較

質問項目	養護教諭の経験年数				P 値
	～9 年	10 年～19 年	20 年～29 年	30 年～	
Q1. 児童・生徒間の友人関係のトラブルはクラスの中で発生していると思う	2.03	2.27	1.95	1.84	n. s
Q2. 児童・生徒間の友人関係のトラブルはクラブ活動・部活動の中で発生していると思う	2.72	2.47	2.10	2.38	n. s
Q3. 友人関係のトラブルはインターネット上の書き込みの中で起こっていると思う	3.28	2.47	2.30	2.72	*
Q4. 携帯電話のメールのやり取りの中で友人関係のトラブルは起こっていると思う	2.81	2.33	2.05	2.58	n. s
Q5. 頻繁に保健室に来る児童・生徒は友人関係に問題を抱えていると思う	2.25	2.60	2.00	1.84	*
Q6. 不登校になる児童・生徒は不登校になる前に保健室に相談に来る	2.94	3.07	2.95	3.02	n. s
Q7. 保健室に来室する児童・生徒の友人関係は大抵把握している	2.22	2.27	2.55	2.36	n. s
Q8. 友人関係の問題が起きたきっかけを児童・生徒（相談者）から聞くことがある	2.06	2.13	1.90	2.00	n. s
Q9. 児童・生徒はクラスの友人関係の話を包み隠さず話してくれる	2.25	2.93	2.50	2.48	n. s
Q10. けがや病気で来室した場合でも児童・生徒から友人関係の話を聞くことがある	2.16	2.20	1.90	2.04	n. s
Q11. クラス内のいじめについて打ち明けられることがある	3.03	3.20	2.60	2.30	**
Q12. 直接被害を受けていない児童・生徒から他の児童生徒の友人関係の問題を打ち明けられることがある	2.75	2.93	2.40	2.28	n. s
Q13. 児童・生徒からの相談への対応にはゆっくりと時間をかけて傾聴している	1.78	1.87	1.70	1.94	n. s
Q14. 児童・生徒からの相談への対応には受容的な態度で関わっている	1.50	1.60	1.65	1.76	n. s
Q15. 児童・生徒からの相談には時にはユーモアをまじえて対応している	2.22	2.07	2.20	2.14	n. s
Q16. 児童・生徒の友人関係に関する相談では児童・生徒が教室に戻ることを目標として対応している	1.63	1.67	1.55	1.36	n. s
Q17. 児童・生徒によっては誰にも相談していない友人関係の問題を養護教諭には相談してくる	2.38	2.60	2.20	2.36	n. s
Q18. 友人関係に問題を抱える児童・生徒は問題の近況を報告しに何度も保健室を訪れる	2.63	3.00	2.35	2.60	n. s
Q19. 不定愁訴と思われる相談でも児童・生徒が気の済むまで保健室に滞在することを許している	3.19	3.47	3.05	2.96	n. s
Q20. 友人関係の問題は当事者同士で解決するように促している	3.03	3.20	3.00	3.18	n. s
Q21. 児童・生徒の友人関係に関する相談に対して相談者の問題点を指摘するようにしている	3.53	3.27	2.95	3.34	n. s
Q22. 児童・生徒からの相談内容によっては担任教師と連携して対応している	1.31	1.20	1.15	1.34	n. s
Q23. 児童・生徒からの相談内容によってはスクールカウンセラーと連携して対応している	3.81	3.33	2.35	3.10	**
Q24. 児童・生徒からの相談内容によっては保護者に情報を伝達している	2.31	2.20	2.20	2.54	n. s
Q25. 児童・生徒の友人関係に関する相談への対応において職員間の連携や情報の伝達は容易ではない†	3.34	3.60	3.25	3.68	n. s
Q26. 教師によっては保健室に児童・生徒が相談に行くことに対して否定的な受け止め方をする	3.19	3.67	3.15	3.70	n. s
Q27. 来室した児童・生徒から友人関係の問題に関する相談をされても対応に困る†	4.06	3.93	4.20	4.40	n. s
Q28. 来室した児童・生徒の友人関係に関する相談内容を担任教師に伝達して良いか悩む†	3.53	3.00	3.50	3.64	n. s
Q29. 児童・生徒からの友人関係に関する相談への対応に十分な時間を確保するのは難しい†	2.69	3.20	2.70	2.62	n. s
Q30. 児童・生徒からの友人関係に関する相談への対応において加害生徒に働きかけるのは難しい†	2.94	2.60	2.60	2.64	n. s

注) 養護教諭の経験年数による比較は一元配置分散分析後、多重比較 (Tukey 検定) を行った。
 n. s 有意差なし * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ †逆転項目

本研究結果からも、養護教諭は受容的な態度で児童・生徒に関わることを実践し、友人関係の問題が起きたきっかけなどの詳細な情報を引き出すことができていた。しかし、どんな状況においても、いつでも受容的に関わっているわけでないことがQ19「不定愁訴と思われる相談でも児童・生徒が気の済むまで保健室に滞在することを許している」の実践率が低いことから伺える。この時期の仲間集団の特徴から考えると、友人関係の問題が発達課題として体験すべき困難なのか、それとも病的なストレスとして体験されているのかを養護教諭は見極める必要があると考える。発達課題として体験すべき問題と認識した場合は、保健室に長く留まらせるのではなく、教室に戻ることを目標とした指導的な対応に重点が置かれるだろう。生徒は、養護教諭に自身を受容してくれる優しさに併せて、場面によっては厳しさも必要となきとあると、状況に応じた適切な【指導】を求めている¹¹⁾。このような観点からも、受容的に関わることおよび教育的に関わることの使い分けや組み合わせは相談者の個性性に合わせて行われる必要があると考える。本研究の具体的な対応に関する結果から、養護教諭は、児童・生徒の相談内容や状況に応じて受容的な態度や指導的介入を使い分けながら実践していることが示唆された。

3. 友人関係に関する問題の早期発見といじめの予防について

三島¹²⁾は、親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究を行っている。研究では、小学校5・6年生455名(男子236名・女子219名)に行った質問紙調査より、親しい友人からいじめられた体験は、男子に比べて女子に多く、親しくない者からいじめられた体験に性差はみられないことを明らかにしている。

このように、親しい友人関係がいじめに発展する可能性があることを考えると、その見極めがいじめの予防には重要である。よってまずは、本研究で分かったような友人関係の問題についての情報を把握していくことは、早期発見につながると考える。

しかし、ここで問題となるのは把握が難しい事例である。岡田¹³⁾は、中学生のストレスコーピングに関する研究で、中学生に質問紙調査を行っている。ストレスに対するコーピングの種類は、努力、相談・援助、あきらめ・がまん、気晴らしの4つである。

この中で、中学生が友人関係ストレスに対して行うコーピングの上位3つは、「1.〈あきらめ〉(13.6%)、2.〈いずれのコーピングも行わない〉(12.2%)、3.〈相談〉(9.7%)」であったことを明らかにしている。また、本調査結果でも明らかのように、現在はSNSやインターネット上での友人関係のトラブルもあることから、ますます問題の発見には困難さが伴うことと考える。

そのような状況にある中、本研究では、養護教諭経験年数が長い養護教諭は、児童・生徒からいじめについて打ち明けられやすい傾向があった。養護教諭歴が短い養護教諭との間には有意差があり、養護教諭は経験を重ねることで、いじめ予防につながる相談対応スキルを培っていることが示唆された。

4. 本研究の限界と課題

児童・生徒の友人関係の問題には様々な様相があるが、本研究ではその内容を限局していないため、広義での実態調査となっている。

また、質問紙による調査では、養護教諭の具体的な児童・生徒を捉える視点や対応の仕方(経験知)について明らかにすることには限界がある。今後は質的な研究によって、養護教諭の語りからそれらの詳細を明らかにしていく必要がある。

V 結論

本調査で対象となった養護教諭は児童・生徒の友人関係の相談に対して、受容的で教育的な関わりを実践していることが明らかとなった。また経験年数が長い養護教諭は「いじめ」について直接被害者から話を聞いていることも明らかになった。いじめの早期発見・予防という観点で、保健室に友人関係の問題に関するどんな情報が集まり、養護教諭がどのような対応を行っているのかを質的研究方法を用いて明らかにすることは、具体策を講じる上で有用であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました養護教諭の皆様へ心より感謝申し上げます。なお本研究は、平成26年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究の助成を受けて実施した。

(受付 2015. 7. 22 採用 2015. 12. 9)

文献

- 1) 初等中等教育局児童生徒課．“平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」．” 文部科学省．
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf, (参照 2015-04-23).
- 2) 森田洋司, 清永賢二：いじめ：教室の病い 新訂版. 208-210, 東京, 金子書房, 1994.
- 3) 伊藤美奈子：保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識：スクールカウンセラーとの協働に注目して. 教育心理学研究, 51 (3) : 251-260, 2003.
- 4) 日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査報告書：平成 23 年度調査結果. 32, 東京, 日本学校保健会, 2013.
- 5) 徳山美智子：学校保健安全法に対応した「改訂学校保健」：ヘルスプロモーションの視点と教職員の役割の明確化 第 4 版. 144, 東京, 東山書房, 2011.
- 6) 中尾香織：第 2 章 必修教科等の研究 10 学校保健 養護教諭の研修コーディネーション：現職研修を通して. 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要, 54 : 116-121, 2012.
- 7) 無藤隆, 高橋恵子, 田島信元：発達心理学入門 I 乳児・幼児・児童. 172-173, 東京, 東京大学出版会, 1990.
- 8) 下山晴彦：面白いほどよくわかる！臨床心理学. 112-113, 東京, 西東社, 2012.
- 9) 落合良行, 佐藤有耕：青年期における友達とのつきあい方の発達的变化.
Japanese Journal of Educational Psychology, 44 (1) : 55-65, 1996.
- 10) 松原みき子, 加藤幸子, 湯川美子, 他：養護教諭の言語的対応スタイル：友人関係を原因として来室する子どもへの相談活動. 日本健康相談活動学会誌, 4 (1) : 66-74, 2009.
- 11) 上原美子, 中下富子：中学校における保健室来室生徒が望む養護教諭の対応. 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 9 : 71-79, 2010.
- 12) 三島浩路：親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究. 社会心理学研究, 19 (1) : 41-50, 2003.
- 13) 岡田佳子：中学生のストレスコーピングに関する研究：学校ストレス研究への ATI パラダイムの応用. 早稲田大学教育学部 学術研究 (教育心理学編), 53 : 15-27, 2005.

Source

**Early detection of and prevention methods for “bullying” observed
in elementary and junior high school students:
fact-finding survey of how school infirmaries handle issues related to friendship of students**

Natsuko TOKIEDA, RN, MHS¹⁾ Kiyomi TAKAHASHI, RN, PhD¹⁾ Masayuki KUROKAWA, PhD²⁾
Yasunao OTSUBO, MA³⁾ Narumi OOSHIGE, RN, ME, MPH¹⁾

The purpose of this study is to clarify the perceptions of school nurses with regards to issues related to friendship in elementary and junior high school, and the state of response to such issues at school infirmaries. Self-administered questionnaires were sent to school nurses registered at the Division of School Nurses in Prefecture A. A total of 381 questionnaires were posted, and 140 were subsequently returned (recovery rate: 36.7%, valid response rate: 100%). SPSS version 22 statistics software was used to analyze data. Results indicated that in terms of perceptions of problems related to friendship amongst students, 67% of school nurses had a rough grasp of the friendships of students who came to the school infirmary and 84% heard about what started the friendship issue from the student who requested counseling. With regards to handling of the matter at the school infirmary, 95% of school nurses showed a receptive attitude, 28% allowed the student to stay in the school infirmary until they calmed down even for indefinite complaints, and 89% treated the issue with the aim of helping the student to return to the classroom. Comparison according to the number of years of experience of school nurses indicated that those with more years of experience tended to be more approachable for students to talk to them about bullying. Thus, results clarified that school nurses received detailed consultations regarding friendship-related issues from students and exhibited a receptive attitude while maintaining the education-focused goal of attempting to help the student to return to the classroom. An issue for the future is the qualitative clarification of perceptions and response of school nurses to formulate specific measures for bullying problems that develop from friendship.

Key words: School nurse, elementary school, junior high school, friendship, bullying

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

2) Aichi University of Education

3) Fukuoka University of Education